

# 接頭辞形成と文法化現象

西川 盛雄

## Remarks on Prefixation and Grammaticalization

Morio NISHIKAWA

(Received September 1, 1998)

Morphological elements of a word are varied and they have their own diachronic origins. Three kinds of morphemes work in word formation, including free morphemes of stem, bound morphemes of affix and bound morphemes of combining form. Focusing upon the diachronic and morphological process of prefixation, the present paper aims at exploring certain aspects of prefixation in terms of the cognitive process of grammaticalization. Some prefixes are inherited from those of the ancient Greek, Latin, and Anglo-Saxon languages. They functioned and still now function as bound morphemes of prefixes. Others are combining forms which once functioned as free morphemes of independent lexical items but now function as bound morphemes of dependent morphological elements. We investigated the list of word-beginnings taken from LDCE (Longman Dictionary of Contemporary English) to explore the detailed ratio of the emergence of prefix in Greek, Latin and Anglo-Saxon origins. As a result, we found that the ratio of the emergence of prefix in Greek origin is the highest, followed by the ratio of the emergence of prefix in Latin and Anglo-Saxon origins. We also hypothesized the importance of the [borrowing-modifying] process in word formation in terms of the grammaticalization process of prefixation in the evolutionary change of language.

**Key words :** morpheme, prefix, grammaticalization, categorization, combining form

### (1) はじめに

語形成において自由形態素 (free morpheme) としての語幹 (stem) に加えて拘束形態素 (bound morpheme) としての接辞 (affix) の果たす役割は大きい。英語の接辞には接頭辞と接尾辞があるが接辞ひとつひとつにはそれなりの通時的、歴史的な意味や機能の由来が存在している。接頭辞においては語根 (root) の前に位置し、接尾辞においては語根の後ろに位置して語根の意味や機能、さらにカテゴリー (文法範疇) の変化に大きく貢献する役割を担っている。ところが接辞の出所・由来については通時的に実にさまざまな種類がある。英語史的にはケルト語系統に加えてギリシャ語、ラテン語、旧来のアングロ・サクソン系の古英語 (OE)、中英語 (ME)、スカンディナヴィア系の言語、ノルマン系統の言語等からの影響を経て今日に至っていることを思えば、英語の諸相は実に多岐にわたる。特に英語における語彙と語形成要素においては結果としてアングロ・サクソン語以外の外国語から借用したものが多く、借用したものを文法上の新たな組み合わせの中で変容していくのである。この〈借用-変容〉のプロセスにおいて新しいものが創られて

---

本稿は平成10年7月11日、熊本言語学研究会 (KLS) において発表を行ったものに加筆修正を施したものである。

いく。

いまひとつ、語は必要性において創られ、慣例化されていくという側面がある。ある新しい概念があり、これに対応する形式（語）がない場合、新たにその形式（語）は創られなければならない。その際、全く新奇なものを勝手に創るのではなく、旧来からある形式を借用してくるのである。それを新しい環境（組み合わせ）の中においたとき新しい機能やカテゴリー、さらには意味が付与されてくる。これが定着していけば新しい形式（語）が再構成され、踏襲されていくことになるのである。必要性に基づくこの〈創造－踏襲〉のプロセスも語の増殖と語形成の多様化に対して大きな貢献をしていくことになる。

接辞形成（affixation）特に接頭辞形成（prefixation）の過程にあつては (i) 元来 un- (*unkind*) や dis- (*disclose*) のように接頭辞として古英語の頃から機能してきたものもあれば、(ii) astro- (*astronaut*) や hydro- (*hydrotherapy*) のように本来自立した語であったものが接辞化の過程を経ていわゆる連結辞（combining form）のように接頭辞として変容していったものもある。また、(iii) over- (*overthrow*) や up- (*uphold*) のように現代英語の副詞的小辞（adverbial particle）などの機能語がそのまま横すべりで接頭辞化していった場合もある。いずれにしても現代英語では接頭辞として大いに活用されている。しかし分類として (i) では辞書によりあまり取扱い方に大きな相違はないが、(ii) の連結辞については辞書により取扱い方がまちまちの場合が多く、ほとんど研究がなされていないのが実状である。(iii) は現代英語において、自由形態素である副詞的小辞が拘束形態素である接頭辞に移行して用いられている文法現象としてあるが、特にそれ以上の取り扱いはしていない。このように語形成のうち、接辞形成については、旧来から接辞であったもの、元々は自立語であったものがいわゆる文法化現象という進化論的（evolutional）なプロセスを経て新しく接辞となったもの、語源的にはアングロ・サクソン語系（OE, ME）に加えてギリシャ語系、ラテン語系などに由来するものなどがある。また拘束形態素である接辞と自由形態素との結合によってなる複合語との境目については微妙かつ重要な問題があることはここで指摘しておきたい。

本稿では特に (ii) における連結辞（combining form）に焦点をあてて接辞形成のプロセスを文法化現象という視点から捉え直し、然るべき辞書でどのようにこれを取り扱っているかを検討していく。さらに形式は小さいが語形成上その果たす役割の大きな接辞（接頭辞）形成とその変遷の過程を文法化現象のプロセスを考慮しながら、現代英語における語源的な分布についても少しでも明らかにしていきたいと思う。

## (2) 接頭辞の分布 (I)

接頭辞はすでに古英語のころからあり、その働きも多彩である。しかし原則として次に来る語幹の意味に大きな影響を与える。接尾辞ほど多くはないにしても、*enlarge* の en-, *defrost* の de- のように接頭辞も文法的範疇（品詞）を変える場合もあるが、概して意味形成上大きな役割を果たし、語幹の意味を豊かにし、多少ともこれを変えるはたらきをする。

一口に接頭辞というが、その由来は英語においては多様である。語源的に元来のアングロ・サクソン系の OE, ME からのものが多いのか、それともギリシャ語系、ラテン語系のものが多いのか、それ以外のものも入り込んでいるのか、本稿で実際に調べてみたいと思う。

現代英語において LDCE (Longman Dictionary of Contemporary English) の 16 刷版では Tables の

ところで145例が上がっている。この辞書は注意深く接頭語に相当するものには Word Beginnings, 接尾辞に相当するものは Word Endings として辞書の末尾にリストされている。しかしその由来と意味的な中身はじつに多様である。このうち (i) 固有名詞性をもった接頭辞の項目 (例えば Austro-, Italo-, Russo-, Sino-, Africo- 等) (ii) 異形態としては異なるが同種の機能や意味をもつものとして考えられるもの (例えば否定を表す接頭辞 in-, im-, il-, ir- など), (iii) infix 的なもの (例えば -andr-) などを省いた結果の 121 例を比較的一般的に英語に現れる有意の接頭辞としてここで問題としてみたい。

それぞれの項目 (item) の語源の情報は AHD (American Heritage Dictionary) の第 3 版 (1996 年版) に依った。すべての項目を調べ、分類した結果は以下のものであった。(AS は Anglo-Saxon, Gk は Greek, L は Latin, MO は multi-origined の省略形である。)

AS	19
GK	50
L	44
MO	5
Others	3
計	121

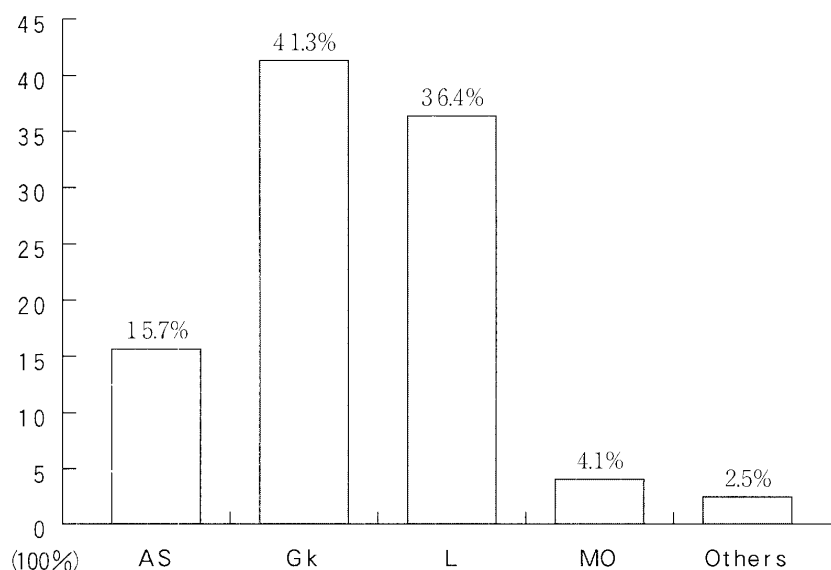
ここで MO は AHD によれば例えば, mis- のように部分的に中英語 (ME) と古フランス語 (OF) から来ているような例, en- のようにギリシャ語, ラテン語語根と考えられるものが含まれる。またその源が複数でひとつに特定化し難い接頭連結辞の例として cross- は AS で *kross*, ケルト語系で *cross*, ラテン語系で *crux* などさまざまな言語に由来しているとしている。

Others については mini- (*miniskirt*) のように現代英語の流行語の一部からつくられたものや politico- (*politico-scientific*) のように現代のイタリア語, スペイン語から取られたものなどを含んでいる。

上の表を百分率で表すと全体 121 例のうち, AS は 15.7%, Gk は 41.3%, L は 36.4%, MO は 4.1%, その他は 2.5% であった。以下棒グラフで示すと次頁上のようなになる。

この表から興味深く言えることは, 英語は元来ドイツ語やオランダ語と並んでゲルマン系のなかでもアングロ・サクソン系の言語にもかかわらず, 接頭辞には AS 系のものが思いのほか少なく, ギリシャ語系統のものがもっとも多いことがわかる。次いでラテン語系のものが多く存在する。これは英語の語彙がギリシャを経てラテンを経てアングロ・サクソン系の言語に入り、維持されていった経緯が偲ばれるが同時に文化の高さの経緯が反映されたかたちで Gr → L → AS の方向で伝わっていったことも示唆している。

語 (words) はある言語圏, 文化圏の必要性に応じて用いられ, 継承されていく。人々が共有し, 生活の必要と個人的な必要に応じて創り出されもする。もし既存の語彙 (lexicon) のなかに必要とする語彙がなければ自ら創るかどこからか借用してこなければならぬ。言語の場合個人の領



域を越えて一つの社会・文化圏として借用現象がおこっていったのである。

それは自立語だけではなく機能語，あるいは頻度数の多いさまざまな語彙にまで及んでいる。人称代名詞の *they/their/them* はスカンディナビア系の言語から借用したように，接頭辞，接尾辞においても本来語に加える形で借用が大いに広がったのである。新しい概念は新しい表現形式を求める。既存のものに適切な形式がなく，あらたな形式を求める必要が生じたとき，すぐにこれを創り出せなければ余所から借用し，必要に応じてこれを変容し，新しい派生語や合成語を再構成するのである。当時ギリシャ語やラテン語は文化の程度は高く，自然の流れとしてアングロ・サクソン系の英語の中に取り込まれていった。やがて同化してなじんだときそれはすでに立派な英語の語彙や語形成要素になっていたのである。

学問を表す接頭語は概ねギリシャ語に由来するが，*socio-* (*sociology*) がラテン系であることは興味深い。ラテン語の *socius* から来て追隨者あるいは仲間 (*follower, companion*) の意味をもっている。

*over-, under-, out-, all-, up-* など現代英語で用いられている副詞的小辞あるいはそれに近い語が文法化現象の結果として接頭辞とされているのは英語の新陳代謝の激しさを物語っているといえよう。これらは元々文形成過程 (*syntax*) において文の中で句構造を構成する要素 (語) として機能しているものである。しかし語形成過程においては語の中で語を構成する要素，とくに拘束形態素として機能している。

### (3) 接頭辞の分布 (II)

それでは次にこの LDCE に記載されている *Word Beginnings* のリストを用いて，旧来から接頭辞であったものがそのまま現在も接頭辞であり続けている場合 (これを *Pref* としておきたい) と，以前はギリシャ語であれ，ラテン語であれ，また旧来のアングロ・サクソン語であれ，かつては自立した *lexical item* として自由形態素であったものが文法化現象の結果として拘束形態素に変容していった場合 (これを連結辞 *CF* としておきたい) のそれぞれが他の辞書ではどのように取り

扱われているかをみてみたい。同じある項目が一つの辞書で Pref であっても別の辞書では CF であったりする場合、あるいはその逆である場合が十分に考えられるからである。

上述の同じ LDCE の項目 121 例を、同じ英国系で LDCE 以外の辞書として Collins English Dictionary (CED) の第 3 版で調べてみると、全体のうち Pref は 50 例、CF は 63 例、記載されていなかったものは 8 例であった。これを百分率で示すと、Pref は 41.3%、CF は 52.1%、記載されていなかったもの (non-listed) は 6.6% であった。この結果を以下に表にしてみる。

	例数	割合
Pref	50	41.3%
CF	63	52.1%
Non-listed	8	6.6%
計	121	100.0%

ここから分かることは英語の接頭辞の中で連結辞 (CF) がいかに多いかということである。これを見ると半分以上が連結辞であることがわかる。

次にアメリカの辞書 RHD (Random House Dictionary) の第 2 版 (1989 年版) で見てみると、全体 121 例のうち接頭辞として記載 (list) されているのは 43 例、連結辞は 71 例、記載されていない (non-listed) のは 7 例、1 例は複合語形成要素ということで記載されている。これをその他として表にまとめると次のように集約される。

	例数	割合
Pref	42	34.7%
CF	71	58.7%
Non-listed	7	5.8%
その他	1	0.8%
計	121	100.0%

これを見ると RHD のようなアメリカの辞書でも連結辞 58.7% で他に比してもっともよく用いられていることがわかる。旧来からの接頭辞の占める割合は 34.7% で三分の一強である。取り上げていないものは 7 例で 5.8% で CED の場合と大差はなかった。

#### (4) 接頭語と連結辞 (CF)

これまで辞書との関係で接頭辞や連結辞分布をみてきたが、両者は基本的にどのような違いがあるのか考察してみたい。例えば次の例をみてみたい。

- (1) a. *disgrace*      *abed*              *ex-wife*              *preview*              *post-war*  
 b. *unkind*          *ishonest*              *insane*              *enrich*              *insure*  
 c. *beseat*          *untie*                  *recover*              *forewarn*              *compromise*

これらはいわば純粹の接頭辞である。(1a)は語幹が名詞、(1b)は語幹が形容詞、(1c)は語幹が動詞の例である。例えば un- は (1b) (1c) 双方にまたがって *unkind*, *uncertain/untie*, *unfold* などにみられるように語幹の形容詞や動詞の意味を逆転する。dis- も (1a) (1b) 双方にまたがっているが *discover/dishonest* のように語幹の名詞や動詞の意味を逆転する。(1c) の re- は *recreate*, *rebound* のように「戻ること」「繰り返す」の概念を語幹に与える。(1b) の in- は次に来る音声学上の変異 (variants) はあるが, *infinite*, *impossible*, *illogical*, *irrational* などと形容詞の意味を逆転したり, また, *intake*, *import*, *illuminate* のように語幹の動詞に” in” (ある領域の中へ) の概念を組み込み, en- は *enrich*, *enlarge*, *ennoble* のように, 次に来る形容詞を動詞にして「結果として」次にくる形容詞のような状態になることを概念化している。(1c) の com- は co-, con- などの変異をもちながら” together, jointly” (American Heritage Dictionary) などの概念を語幹に付け加える。そしてこれらの本来的な接頭辞は通時的に旧来から接辞であったものが多く, 依存性と生産性に富み, 今日まで伝えられてきているものが多い。この種の旧来からの接頭辞の特徴としては,

- (2) a. 語幹の前に位置し、拘束形態素であること  
 b. 語源的に以前から接頭辞として機能していたこと  
 c. 比較的生産的 (productive) であること  
 d. 事実として比較的短小、つまり一音節であること  
 e. 語の主要部になりにくいこと  
 f. 意味変化には大きな働きをすること  
 g. 第一強勢 (primary stress) をもたないこと

などの特徴を上げることができる。これに対して連結辞は本来的な接頭辞と同じく語幹の前に位置する拘束形態素であるが, その機能においてこれとは趣を異にするところが多い,

- (3) *astronaut*              *agriculture*              *hydrofoil*              *neuroscience*  
       *chronometer*          *cardiograph*              *photograph*              *telescope*  
 (4) *maltreat*              *circumstance*              *ambidextrous*              *omnivore*  
       *radiochemistry*          *matricide*                  *ultramodern*              *vice-president*

これらの連結辞の例では例えば, (3) の astro- はギリシャ語系列の CF で *astron* (*star*), *agro-* は同じくギリシャ語で *agro* (*field*) など元来は自立語であった。また (4) の mal-, *circum-* などはラテン語系列の CF で本来それぞれ *male* (*badly*), *circum* (*around*) を意味する自立語であった。しかしいずれにしても astro-, *agro-*, mal-, *circum-* の後ろに来ることのできる語はそう多くはない。つまり語形成上の生産性 (productivity) は低いといわざるをえない。

次に接頭連結辞 (以下 PCF: prefixal combining form) は意味論的に下位範疇化現象を可能にする傾向をもつ。例えば *hydrotherapy* は *therapy* の一種には違いないが必ず *hydro* (*water*) と何らか

の関係がある。 *cardiograph* はある記録 (*graph*) には違いないが *cardia* (*heart*) に何らかの意味関係があるものとしてある。 *chronometer* は *khronos* (*time*) によって下位範疇化され、高精度の精密時計として命名されているのである。下位範疇化しているといっても、それ故に意味論的には語幹と同等の決定的な役割を担っているといえる。この種の語形成について一般化すれば次のように形式化することができよう。

(5)  $W \implies (\text{Stem (subcategorized by PCF)})$

これは接頭連結辞である PCF に下位範疇化されて語幹 (*stem*) の意味が狭められ、特定化され、結果としてひとつの新しい語 ( $W$ : word) が造り出されることを示している。

意味論的に下位範疇化する程の重みを持つがゆえに音節 (*syllable*) をいえばけっして単一の音節に限ることはない。記述の *astro-*, *agro-*, *hydro-*, *circum-* などはずべて二音節である。*electro-*, *hetero-*, *anthropo-* などは三音節の長さをもっている。つまり多音節の語は機能性よりも内容性が大きなウェイトを占めていると考えることができる。

また、次に示すように接頭連結辞には *mono-*, *di-*, *tri-*, *quadri-*, *penta-* さらに *kilo-*, *centi-*, *deci-* など数字や計量の単位数を表すものが多い。

(6) *monopoly*      *dichotomy*      *triangle*      *pentameter*  
*kilogram*      *millimeter*      *centigrade*      *decibel*

これは本来の接頭辞とは趣を異にしている。そして強勢 (*stress*) については *agriculture*, *hydrofoil*, *prototype* などのように PCF のあるところに第一強勢があり、さながら複合語の呈をなしているといえる。以上を簡潔にまとめてみるとつぎのようになる。

- (7) a. 接頭連結辞 (PCF) は語源的には元来自立した自由形態素であったこと  
 b. 基本的に生産性はあまり大きくなく、結合される語幹は比較的限られたものであること  
 c. 意味変化には大きな役割を果たすが、それ以上に意味論的に下位範疇化する機能をもっていること  
 d. 必ずしも比較的短小、つまり一音節であるということはない  
 e. 語の中で主要部ではないにしても周辺部といい切れぬ同等性をもっていること  
 f. 本来的な接頭辞と違って接頭連結辞には計量的、数量的な意味がよく組み込まれていること  
 g. 接頭連結辞によっては語の中で第一強勢 (*primary stress*) をもってくること

などを特徴としてあげることができる。

次に語幹に対してその意味的属性の形容詞の機能をもったものが以下のように接頭連結辞として機能している場合がある。

(8) a. *minicar*      *miniskirt*      *miniature*      *minibus*  
 b. *telescope*      *telephone*      *telepathy*      *telegram*

- c. *cryptograph*    *cryptogam*    *cryptogenic*  
 d. *microfilm*    *microbiology*    *microprocessor*  
 e. *macroeconomics*    *macrobiology*    *macrocosm*

ここで (8a) の例で mini- は small, (8b) の例で tele- は distant, (8c) の例で crypto- は secret, (8d) の例で micro- は small, (8e) の例で macro- は large の意味概念を表している。そしてそれぞれは本来的には形容詞的属性を表しているのである。 *minicar* は small car, *telescope* は distant なところを視る (visual) scope である。 *cryptograph* は secret あるいは hidden な文書 (written record(s)) の意味合いである。

最後に認知的には第一義的には空間概念を表す under-, over-, sub-, out-, up- などが接頭連結辞として用いられた場合,

- (9) a. *underground*    *underage*    *overnight*    *overtime*    *submarine*  
           *subway*    *outfield*    *outline*    *upcountry*    *uphill*  
 b. *underestimate*    *underlie*    *overthrow*    *overcome*  
           *subjoin*    *submerge*    *outlive*    *outfight*    *uphold*    *uplift*

のような例がある。(9a) ではこれら接頭接辞化したものの後ろに名詞が来る場合、(9b) では動詞が来る場合である。確かに *underground*, *submarine*, *subway*, *uphill* のように物理的な空間概念を示す場合もあるが、*overnight*, *overtime*, *underage* のように時間概念を表す場合も少なくない。

これらは人間の認知の側面からみて、空間、時間の物理的、あるいは抽象的、比喩的用法であるが、ひとつの名詞あるいは動詞の意味の領域を拡げて豊かな世界を創り出しているといえるであろう。

## (5) 文法化現象と接頭辞

Heine (1991:21) によれば言語の構造とは既存のものとしてあり、言語現象のさまざまな側面を統括しているのではなく、むしろ絶えず構造化の方向に向かって言語は動いていっているのである。“a continual movement toward structure” という由縁である。そして文法とは既にあるものではなく、出現してくるものとしてあるのである。彼が“Grammar is always emergent but never present.” という由縁である。接頭連結辞にその痕跡を見い出すことが可能である。

ある話し手が何かある新しい概念を表現したいと思い、しかも既成の語彙 (lexicon) のなかに適切な形式 (語彙) がない場合、新しく工夫しようとする。その工夫のあり方として旧来の語彙から借用し、これを変容して新しい語彙の創造を成し遂げるのである。時間とともにそれが受け入れられ、一般化され、使用される頻度数が増えてくると一つの語彙として辞書に list されてくるのである。

上の (9) の例でみた under-, over-, out-, up- などは副詞的小辞 (adverbial particle) であるが、統語構造のなかで前置詞や副詞として一定の文法的役割を果たしている。しかしこれが形態論のなかで語形成における接頭辞として機能しているいわば統語論から形態論のレベルへの越境現象が起こっていると考えることができるのである。



副詞的小辞ではなく、かつて名詞や形容詞／副詞であったギリシャ語やラテン語などが統語論の中でのその名詞としての自立性をやめて、形態論における語形成のなかで接辞として機能する場合がある。ここに借用と変容という語形成上の創造的な工夫が働くのである。以下にギリシャ語とラテン語に関していくつかの例を list しておきたい。(Lはラテン語、Gkはギリシャ語、鍵括弧〈 〉は中心的な意味を表す。)

(10) a. omni-	(L)	〈all〉	<i>omnibus</i>	<i>omnipotence</i>	<i>omnivorous</i>
mal-	(L)	〈bad〉	<i>maltreat</i>	<i>malfunction</i>	<i>malcontent</i>
non-	(L)	〈not〉	<i>nonsense</i>	<i>nonlinear</i>	<i>nonpolitical</i>
trans-	(L)	〈across〉	<i>transform</i>	<i>translate</i>	<i>transfigure</i>
ultra-	(L)	〈beyond〉	<i>ultraviolet</i>	<i>ultramarine</i>	<i>ultramodern</i>
b. aero-	(GK)	〈air〉	<i>aeronautics</i>	<i>aerospace</i>	<i>aerodynamic</i>
agro-	(Gk)	〈field〉	<i>agriculture</i>	<i>agronomy</i>	<i>agrobioligy</i>
astro-	(Gk)	〈star〉	<i>astrophysics</i>	<i>astronaut</i>	<i>astrology</i>
hydro-	(Gk)	〈water〉	<i>hydrotherapy</i>	<i>hydrometer</i>	<i>hydrofoil</i>
hyper-	(Gk)	〈beyond〉	<i>hyperbole</i>	<i>hypercritical</i>	<i>hyperactive</i>
photo-	(Gk)	〈light〉	<i>photograph</i>	<i>photocopy</i>	<i>photosensitive</i>
poly-	(Gk)	〈much〉	<i>polysemy</i>	<i>polysyllable</i>	<i>polytheim</i>

(10a) (10b) のこれらの例はそれぞれ自由形態素の語から接頭連結辞に変容されたもので文の中で用いられていた要素から語形成上の形態論の領域への「越境」を果たし、接頭辞の位置に来て拘束形態素としての機能を果たしている。接頭連結辞はさらに機能性を増し、接辞化が進んでいくと考えられる。これを簡潔にまとめると、

(11) 語 (Lexical Item) > (接頭・接尾) 連結辞 (CF) > 接辞 (Affix)

というライン (cline) で捉えることが可能である。

この過程には (i) 内容語 (content word) から機能語 (function word) へ、(ii) 単一方向性 (unidirectionality)、(iii) 意味論的希薄化 (semantic bleaching)、(iv) 脱範疇化現象 (deategorization) といった文法化現象と言われる言語学上の原理が働いている。つまり文法化現象の基本原則が長い言語の歴史の流れの中で接辞形成という過程を通して働いているのである。そしてこの過程においては、新しい概念の発生に対しては、それに見合う発想形態と表現形式を創り出すという人間の基本的な認知過程が働いているといえるのである。

## (6) 接頭連結辞 (PCF) の諸相

文法化現象はある与えられた言語形式の品詞や意味、機能などの言語変化を説明するひとつの強力な仮説である。Heine et al. (1993:15) で触れられているが、*while* はかつては時を表す名詞であった。しかし今は接続詞として用いられている。しかも時間概念だけではなく、譲歩や因果

関係を表す場合にも用いられるに至っている。他に *seeing*, *considering* などは動詞に-ING が付いて接続詞の機能を果たすようになった。-ED が付いた例としては仮定、条件を表す *provided* (that) がある。*concerning* は同じく動詞に-ING が付いて前置詞として用いられるようになった。冠詞の *a/an*, *the* はそれぞれ以前は *one*, *that* に相当する語であった。また Hopper & Traugott (1993: 6) でも触れているように、*back* は物理的に「背中」を意味する語が同じ名詞で「後ろ」になり、やがて動詞、あるいは副詞に分化して用いられ、さらに副詞的小辞として使用が拡張されていったと考えられる。

接頭連結辞 (PCF) においても本来は自由形態素として自立した語であったものが拘束形態素として用いられるようになった。以下の例は具体的に PCF といわれるものについて、(i) その通時的あるいは歴史的な由来 (ii) 元来の基本的、中心的な意味 (iii) 基本的の文法カテゴリー、加えて (iv) 実際の語の例を調べて列挙したものである。これら (i) から (iv) については ACD の第 3 版の *Word Beginnings* のリストを参照した。(N は名詞、A は形容詞、Adv は副詞的小辞、Prep は前置詞、Q は数量詞を表す。)

- (12) *aero-* < *aer* (= *air* <Gk; N>): *aerogram aerodynamics*  
*agro/i-* < *agros* (= *field* <Gk; N>): *agriculture agronomy*  
*ambi-* < *ambhi* (= *both* <L; A>): *ambiguity ambivalence*  
*ante-* < *ante* (= *prior to* <L; A>): *anteroom antenatal*  
*anthropo-* < *anthrōpos* (= *human being* <Gk; N>): *anthropometry anthropology*  
*anti-* < *anti* (= *opposite* <Gk; A>): *antithesis antiapartheid*  
*aqua-* < *aqua* (= *water* <L; N>): *aquacade aquarium aquaplane*  
*arch-* < *arkhein* (= *rule* <Gk; N>): *archbishop archangel arch-thief*  
*astro-* < *astron* (= *star* <Gk; N>): *astronaut astro-physics*  
*auto-* < *autos* (= *self* <Gk; N>): *automobile automatic auto-suggestion*  
*cardi-* < *kardia* (= *heart* <Gk; N>): *cardiograph cardiovascular*  
*centi-* < *centum* (= *hundred* <L; Q/A/N>): *centipede centigrade centimeter*  
*chrono-* < *khronos* (= *time* <Gk; N>): *chronometer chronology*  
*counter-* < *contrā* (= *contrary* <L; A>): *counterexample counterattack*  
*equi-* < *aequus* (= *equal* <L; A>): *equilateral equiangular*  
*fore-* < *fore* (= *in front* <AS; Prep>): *foreground forecast forehead*  
*foster-* < *fōstor* <AS; N>): *foster-child fosterparents*  
*hetero-* < *heteros* (= *other* <Gk; A>): *heterogeneous heterology*  
*homo-* < *homos* (= *same* <Gk; A>): *homophon homosexual homograph*  
*hyper-* < *huper* (= *above/beyond* <Gk; Adv/A>): *hyperacute hyperacid*  
*inter-* < *inter* (= *btween* <L; Prep/Pref>): *intercity interactive intercollege*  
*intra-* < *intrā* (= *within* <L; Prep>): *intraocular intranuclear*  
*macro-* < *macros* (= *large* <Gk; A>): *macronesia macronucleus*  
*mal-* < *malus* (= *bad* <L; A>): *maltreat malfunction*  
*micro-* < *mikros* (= *small* <Gk; A>): *microcircuit microcomputer*  
*mis-* < *mis-* (= *badly/failure* <partly from OE & OF; Adv>): *mislead misfire*  
*multi-* < *multus* (= *much/many* <L; Q/A>): *multicolor multimedia*

neo- < neos (= new <Gk; A>): *neoclassic neocolonialism*  
 neuro- < neuron (= sinew <Gk; N>): *neurosis neuroscience*  
 non- < non (= no/not <L; A/Adv>): *nonsense non-assertive*  
 nona- < nonus (= nine <L; Q/A>): *nonagon nonary*  
 omni- < omnis (= all <L; A>): *omnibus omnipotent*  
 pan- < pan (= all <Gk; A>): *panorama pan-American panchronic*  
 para- < para (= beside/near <Gk; Prep>): *paranormal parathynroid*  
 photo- < phos (= light <Gk; N>): *photograph photosphere*  
 poly- < polus = much/many <Gk; Q/A>): *polysemy polygraph*  
 post- < post (= after <L; Adv/P>): *postwar postmodern*  
 pre- < prae (= before/in front/earlier <L; Adv/P>): *prewar presuppose*  
 proto- < prōtos (= first in time/primitive <Gk; A>): *prototype protolanguage*  
 pseudo- < pseudēs (= false <Gk; A>): *pseudoscience pseudopodium*  
 quasi- < quasi (= as if <L; Conj>): *quasi-cholera quasi-parish*  
 semi- < sēmi- (= half <L; Pref>): *semifinal semilunar*  
 sub- < sub (= under/below <L; Prep>): *subway subconscious*  
 tele- < tele (= far <L; A>): *telescope telephone telepathy*  
 trans- < trāns (= across/through <L; Prep>): *transocean transformation*  
 ultra- < ultra (= beyond, distant <L; A>): *ultraviolet ultramodern*  
 uni- < ūcus (= one <L; Q/A/N>): *unicorn uniform unilateral*  
 vice- < vice (= deputy <L; N>): *vice-president viceconsul*

次に学問を表す言い方についても接頭連結辞が大きな役割を果たしている。新しい学問領域には新しい認識に基づく新しい命名が必要になる。このとき造語の方策としてギリシャ語あるいはラテン語などの当時としてはソフィストケイトされた形態素を用いて学問領域の命名を果たすのである。そしてそれは現代においても顕著である。以下はよく知られた例であるが列挙して置きたい。

- (13) physio- < phusis (= nature <Gk; N>): *physiography physiology*  
 psycho- < psukhē (= soul/life <Gk; N>): *psychology psychoanalysis*  
 bio- < bios (= life <Gk; N>): *biology biochemistry*  
 socio- < socius (= companion <L; N>): *sociology socio-cultural*  
 techno- < teknhē (= technique <Gk; N>): *technology technocracy*  
 geo- < gēo (= earth <Gk; N>): *geology geochronology*

興味深いことはこの種の接頭連結辞では、ラテン語由来の socio- を除けばすべてギリシャ語由来の連結辞であるということである。これは学問領域の多くのものがギリシャ語、ギリシャ文化の恩恵に因ってもたらされたものであることが伺える。

さらにアングロ・サクソン語 (OE, ME) 系列のなかで現代英語でもよく用いられる前置詞、あるいは副詞的対格が接頭連結辞として機能する場合が多い。しかもこの場合は各辞書は概ね接頭辞として取り扱っている。英語史的には Bradley (1904) も指摘するようにこの型に依る造語法

は最近では新しい語を造ることはできない。彼の用いた例にしたがえば、*overtake a person*（人に追いつく）と *take a person over*（人を連れて行く，だます），*upset a thing*（物をひっくり返す）と *set up a thing*（物を組み立てる）とではそれぞれ意味が大きく違うのである。以下のものがこの種の例である。

- (14) in-/im- < *intake imprint indoors*  
 out- < *outburst utcome outstanding*  
 up- < *uphold upheaval upgrade upward*  
 down- < *download downgrade downhill*  
 over- < *overthrow overripe overtired*  
 under- < *underwear underestimate underfloor*  
 after- < *afterbirth aftermath aftersales*  
 cross- < *crosscultural crossbar crosscut*

興味深いことに、アングロ・サクソン系の名詞が接頭連結辞として用いられる場合がある。次の *self-*, *step-* などが典型である。さらに LDCE では代名詞の *she/he* がそれぞれ雌雄を表す場合も接辞として取り扱われている。

- (15) *self-* < *self* (= *self* <AS; N>) *self-support self-care*  
*step-* < *stēop* (= *not real* <AS; A>) *stepmother stepbrother*  
*he-* < *hē* (= *male* <AS; Pron>) *he-goat he-cat he-bear*  
*she-* < *sēo* (= *female* <AS; Pron>) *she-goat she-cat she-bear*

## (7) 結語

言語は変化し、進化する。それは文化的な遺伝子 (meme) のひとつといえよう。19 世紀的な通時言語学、歴史言語学においてはすでに多かれ少なかれこの「進化」の視点が入っていた。発音の変化、意味の変化、文法の変化などは他言語との混交を動機 (motivation) として英語において大きな変遷を遂げてきたのである。文法化 (grammaticalization) という用語を最初に用いたのはフランスの言語学者 A. Meillet であった。(cf. Hopper & Traugott 1993:18)。すでに Bradley (1904) は英語語彙の通時的変遷の中で、「合成」の方策が英語における新しい語形成に寄与していることを例を添えて指摘している。彼は、*overcome*, *inlay*, *outlive*, *upturn* などを「副詞+動詞」の合成語としているが、ここでは副詞の部分が接頭連結辞として機能していることを特に取り扱ったものである。彼は “And yet not only does Modern English possess an enormous number of compounds, but new ones are continually introduced.” と指摘しているように、現代英語では夥しい合成語が存在しており、さらに今も新しい合成語が絶えず作り出されているのである。

語形成において接辞形成をめぐる文法化現象の問題は大きな問題であり、特に英語の理解に際しては重要である。本稿では LDCE に記載 (list) されている語 (幹) の前に来るもの (Word Beginnings) を基礎にして接頭辞と接頭連結辞について調べてみた。英語に入っている接頭接辞と接頭連結辞 121 例のうちギリシャ語系、ラテン語系、アングロ・サクソン系に分けてその実際

の分布について調べてみた。その結果アングロ・サクソン系の言語にもかかわらず、英語における接頭辞はギリシャ語系統のものが最も多く、ラテン語系統が次に多く、OE, ME などアングロ・サクソン系統のものは思いの外少ないことがわかった。さらにこの文法化現象の実現している度合いをそれぞれの辞書がどのように取り扱っているかを調べてみた。結果は辞書によってばらつきがあり、そのばらつきにはそれぞれの辞書の文法化現象に対する基本的な対応姿勢あるいはポリシーが示されており、興味尽きないものがある。また文法化現象の一環として統語論レベルから形態論レベルへの越境現象によって自由形態素であったものが拘束形態素に変化していった過程を垣間みることができた。ここには借用と変容によって成る文法化現象を垣間みることができる。

新しい概念には新しい形式が求められる。そして形式に妥当なものがない場合、新奇に異様なものを一時的に造るよりも旧来の語や文法形式を借用 (borrow) してこれを新しい組み合わせにおいて新しく変容 (modify) していくのである。そこに地道ではあるがひとつの創造のプロセスが存在する。本稿においては語形成において通時的な視点を考慮した。そして [借用 (borrowing) — 変容 (modifying) — 再構成 (reconstruction)] のプロセスが接頭辞形成における文法化現象の観点から、特に接頭連結辞 (PCF) において強く働いていることを指摘した。

## References

- Adams, Valerie. 1973. *An Introduction to English Word-Formation*. Longman, London.
- Bradley, Henry. 1904. *The Making of English* (Revised Edition by S. Potter in 1970, Seibido, Tokyo.), Macmillan & Co. Ltd., London.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Bybee, Joan R. & Perkins, W. Pagliuka. 1994. *The Evolution of Grammar*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Denning, Keith & William R. Leben. 1995. *English Vocabulary Elements*, Oxford University Press, Oxford.
- Dikken, Marcel de. 1995. *Particles*, Oxford University Press, Oxford.
- Givón, T. 1989. *Mind, Code and Context*, Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey.
- Heine, B. U. Claudi, F. Hunenemeyer. 1991. *Grammaticalization*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Hopper, Paul J. and E. C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Katamba, Francis. 1993. *Morphology*, MacMillan, Houndmills, Hampshire & London.
- Namiki, Takayasu. 1988. "The Categorical Status of *Like* from a Morphological Viewpoint", *English Linguistics* Vol. 5, The English Linguistic Society of Japan. pp. 1-18.
- Nishikawa, Morio 1997. "Morphologization and Combining Forms," *The Memoirs of the Faculty of Education*, Kumamoto University. pp. 207-223.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech, Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London & New York.
- Sciullo, Anna. M. Di & Edwin Williams. 1987. *On the Definition of Word*, The MIT Press, Cambridge.
- Spencer, Andrew. 1991. *Morphological Theory*. Basil Blackwell, Oxford.
- Taylor, John R. 1995. *Linguistic Categorization* (2nd edition). Clarendon Press, Oxford.
- Trask, R. L. 1996. *Historical Linguistics*. Arnold, London.
- Vincent, Nigel. 1997. *Parameters of Morphosyntactic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Williams, Edwin. 1981. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word,'" *Linguistic Inquiry* 12. pp. 245-274.